慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	培養理論に関する一考察
Sub Title	A study of cultivation theory
Author	大坪, 寛子(Otsubo, Hiroko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2003
Jtitle	哲學 No.110 (2003. 3) ,p.121- 150
JaLC DOI	
Abstract	Cultivation theory, which examines the influence of television on viewers' conceptions of social reality (= "cultivation") developed by Gorge Gerbner and his colleagues, has three decades' research history. During the period, it has been exposed to various critiques and has been elaborated to get two findings. One is "mainstreaming", which makes the differences between sub-groups smaller by cultivation on their perceived reality and their beliefs or attitudes. The other is "resonance", which is a phenomenon that a particular sub-group is cultivated more by far among others. Mainstreaming has a function to homogenize and conventionalize of heterogeneous people. Resonance, which is difficult to confirm its appearance because the method to testify it is problematic, could contribute to risk perception research. The aim of cultivation theory has been misunderstood because its methodology does not conform to its aim. However, it has possibility to bridge between empirical studies and critical theories if the limitations could be overcome.
Notes	特集コミュニケーション課程の諸相 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000110-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

培養理論に関する一考察

大　坪　寛　子*

A Study of Cultivation Theory

Hiroko Otsubo

Cultivation theory, which examines the influence of television on viewers' conceptions of social reality (= "cultivation") developed by Gorge Gerbner and his colleagues, has three decades' research history. During the period, it has been exposed to various critiques and has been elaborated to get two findings. One is "mainstreaming", which makes the differences between sub-groups smaller by cultivation on their perceived reality and their beliefs or attitudes. The other is "resonance", which is a phenomenon that a particular sub-group is cultivated more by far among others. Mainstreaming has a function to homogenize and conventionalize of heterogeneous people. Resonance, which is difficult to confirm its appearance because the method to testify it is problematic, could contribute to risk perception research. The aim of cultivation theory has been misunderstood because its methodology does not conform to its aim. However, it has possibility to bridge between empirical studies and critical theories if the limitations could be overcome.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

1. はじめに

2003年は，日本でテレビ放送が開始されてから50年の節目にあたる．この間，新しいメディアが次々と登場し，かつては「ニュー・メディア」と言われたテレビも，もはや全く「新しくない」メディアとなってしまった．しかし，今でも，あらゆる世代や地域の人々に広く利用されている最もポピュラーなメディアであることには，違いあるまい．自分を取り巻く世界がどのようなものであり，今，どのようなことが起きているのか，それを知るために多くの人々が最も依存しているメディアは，今なおやはりテレビであろう．

日本より10年以上も前にテレビ放送が始まったアメリカ合衆国で，このテレビというメディアの特別な機能に注目し，1960年代の終わりから30年にわたって研究を続けてきたのがGeorge Gerbnerである．Gerbnerは共同研究者とともに，テレビを社会化のエージェントと捉え，「文化指標研究 (Cultural Indicators)」というプロジェクトを展開した．本稿では，そのGerbnerらの研究のうち，特に「主流形成」と「共鳴現象」という2つの知見に着目し，検討を加えてみたいと考える．これらの知見は，研究の初期に批判を受けたことによって発見するに至ったものであり，彼ら自身も培養理論の「精緻化 (elaboration)」(Gerbner et al., 1980)と評価するものである．培養理論が新しい展開を見せる契機となった重要な知見であるが，これに注目した研究は少ない．また，Gerbnerらの研究には，これ以外にもさまざまな批判がなされてきたが，実証面での方法に関するものが主で，研究目的と研究方法との関係を検討したものはほとんどなかった．しかし斉藤も指摘するように（斉藤，2002: 23･38)，彼らの問題意識とその研究方法には，ずれがあるように思われる．本稿では，この問題についても検討を加えてみる．そして最後に，この培養理論が，テレビ放送開始から50年を経た今，どのような有効性と発展の可能

性を持ち得るのかについても考えてみたい.

2. 培養理論とは何か

培養理論とは，アメリカのコミュニケーション研究者 George Gerbner によって提唱されたものである．彼は，テレビが他のメディアとは異なって特別な機能を持つことに注目した．テレビは特にリテラシーも必要なく，どこの家庭にもあり，いつでも見ることができるメディアである．アメリカの一般家庭では，一日約7時間テレビがつけられており，多くの人々は，読み書きを覚える前から，圧倒的に多くの時間をテレビとともに過ごしている．テレビは多様な人々に凝集されたメッセージとイメージのシステムを大量に送り続け，人々はそれを非選択的に，かつ儀礼的に消費している．こうしたことから Gerbner は，テレビが人々の現実認識や信念や態度，価値観に及ぼす長期的・累積的な影響に注目した.「テレビが娯楽や情報の支配的な情報源となるまでにテレビのメッセージに接触し続けることは，テレビ自体が持つ価値と視点を，繰り返し確認し養うこと，つまり培養 (cultivate) するようなものである」と彼らは述べている (Gerbner et al., 1994: 24).

Gerbner はこうした問題意識を持って，同僚たちと1960年代後半から「文化指標研究 (Cultural Indicators)」という研究プロジェクトを進めてきた.「文化指標研究」とは,「制度過程分析 (institutional process analysis)」「メッセージ・システム分析 (message system analysis)」「培養分析 (cultivation analysis)」の3つから成るとされているが,「制度過程分析」はほとんど手つかずのままである．特別な機能を持つテレビの影響を明らかにするには，個々の番組ではなく，テレビのメッセージを全体として捉えたものを分析の対象としなければならないと Gerbner らは考えていたが，そうしたテレビ番組全体にわたって頻繁に現れる一定のパターンを明らかにするのが「メッセージ・システム分析」であり，その結果を基

に，それが人々の現実認識や信念，態度，価値観に与える影響を明らかにするのが「培養分析 (cultivation analysis)」である．具体的には，テレビの長時間視聴者（heavy viewers: 以下「重視聴者」と表記する）と短時間視聴者（light viewers: 以下「軽視聴者」とする）との間で，現実認識や信念などを比較する．テレビの中の世界の現実は日常生活世界の現実と異なっており，テレビを長時間視聴する者たちは，短時間視聴者よりも，情報源をより多くテレビに依存しているため，テレビの中の世界に近い現実認識を行い，そうした認識に基づいた信念や態度を形成するだろうとの仮説に基づいている．

彼らがメッセージ・システム分析によって明らかしたことは，主としてテレビの中の世界は暴力に満ちているということだった．従って，それに基づいて行われる培養分析でも，暴力や犯罪に対する人々の認識や態度が問いの中心となった．他のトピックスでの研究も確かに存在するが，暴力や犯罪を扱ったものが Gerbner らの研究では最も多い．

メッセージ分析の結果に基づいた質問で，「テレビ寄りの回答 (“the television answer”)」をする者の割合と，テレビ視聴量（3 段階に分類されることが多い）との相関関係は，概して弱い．これまでの培養分析の結果をメタ分析した Morgan & Shanahan (1997) によると，培養分析で得られた研究の効果サイズは，r=.091 であった．これは，培養理論で用いられる典型的な質問を行った研究について，テレビ視聴量と「テレビ寄りの回答」との相関係数を，1 研究で報告された複数の結果の平均値を出して 1 つにし，そのようにして集められた 52 の研究の 52 の相関係数について，さらに平均をとった値である（サンプルサイズによる重みづけは行われている）．結局，両者の関係は，このように弱いものであることが証明されたが，Gerbner らは，このように関係は弱いもの (modest) であっても，それが意味することは決して小さくはないことを，氷河期や地球温暖化での気温のわずかな上昇にたとえて述べている．「共通した視点の培養

で，わずかながらも広く行きわたった変化は，文化的な気候を変え，目に見える行動の変化を必ずしも伴わないままに，社会的・政治的意思決定のバランスを転倒させてしまうかもしれない」と彼らは述べている (Gerbner et al., 1994: 26). しかし，このような弱い関係しか見られないことに対し，理論的・方法論的に再検討する必要性を示唆するものとして捉える方が，意味があるのではなかろうか．Potter も，恐らくそのように考えた者の一人だろう．これまでの培養理論に対する批判をまとめた上で，その修正点を提案している．以下，培養理論に対する主な批判点を，Potter (1993) の整理に依りながら概観しておく．

3. 培養理論に対する主な批判

これまでに，培養理論に対しては，さまざまな批判が出されてきた．初期の頃は方法論的な問題や結果の解釈をめぐるものが多かったが，その後はもう少し広い見地からの批判や問題点の指摘が多くなっている．Potter (1993) は，培養理論の効果サイズを上げるためには，「文化指標」「接触」「関係」という概念の見直しが必要であると主張する．以下，これまでの批判点を踏まえながら，Potter が指摘した問題点について，簡単にまとめておく．

まず「文化指標」について，Potter は，第一にテクストの中の意味に対する解釈を改めなければならないと述べる．たとえ，テレビの中の世界が暴力に満ちていたとしても，その意味は文脈によって変わってくる．しかし，Gerbner らの研究では，暴力が用いられる文脈は全く考慮されていないのである．多くの犯罪ドラマでは，暴力は，主にヒーローによって，正義を回復するために用いられている．その文脈を考慮するなら，そこから培養される認識が「冷たい世間 (mean world)」だと想定することには問題がある．むしろ，果敢に挑む力と正義の感情 (feelings of aggressive power and righteousness) ではないかと Potter は述べている．第

二に，オーディエンスがどのようにテレビのメッセージを受け取っているかについての配慮が全く欠けている点を改めなければならないとPotterは言う．現在の方法では，第一点目で述べたように修正の余地はあるが，一つの解釈であるメッセージが提示され，オーディエンスはそれに対する賛否を回答するだけである．しかし，オーディエンスの読みはもっと多様なのだと彼は指摘する．第三点目は，いわゆる第一次培養 (first-order cultivation) と第二次培養 (second-order cultivation) の関係についてである．事象の発生頻度や数の見積もりに現実認識の歪みが生じるという第一次培養から，それに基づいた信念や態度が形成されるという第二次培養が生じるとGerbnerらは考えていたが，実は両者は別のものであることを認識しなければならないとPotterは述べている．

次にテレビへの「接触」についてであるが，第一点目は培養理論での基本的想定に対しての批判である．テレビ全体に流れている統一されたメッセージ (uniformed messages) の存在と，非選択的視聴の二点が培養理論では想定されているが，いずれもGerbnerらの研究当初には有効だったかもしれないが，現在は必ずしも当てはまらない状況にあり，もし，これらの想定にこだわるなら，それを証明する必要があるとPotterは主張する．現在はテレビ視聴全体で見るよりも，ジャンル別の視聴の方が有効であり，それはすでに複数の研究結果からも明らかであるとPotterは言う．第二点目は接触時間の捉え方についてであるが，一日の視聴時間を尋ねるより，週単位で尋ねる方が有効だと彼は述べている．第三点目は，テレビの優位性 (dominance) の問題である．重視聴者の場合，日常生活世界の現実に接する時間が少ないのでテレビの優位性が高いとGerbnerらは考えているが，テレビの優位性を問題にするなら，視聴時間だけが指標ではないとPotterは主張する．たとえ視聴時間は長くなくとも，それが特殊なテレビ番組の視聴のみに偏っていたなら，むしろそちらの方が優位性が高いだろうとPotterは述べている．

第三に「関係性」についてであるが，問題点として，①テレビ視聴量と「培養」の関係が直線的だと捉えていること，②対称性を持つ関係だと捉えていること，③統制 (controls) 使用と結果の解釈に問題があること，④因果の方向が逆の可能性もあること，⑤メッセージの高度な一般化を目指し過ぎていることなどをPotterは挙げている．テレビ視聴量と「培養」との関係が弱いのは，こうしたことが原因となっていると彼は言う．これらの指摘の中には，必ずしも他の研究者の賛同を得ているわけではないものも含まれているように思われるが，①についてPotter自身は，テレビ視聴と「培養」の関係は必ずしも直線的でなければならないとは考えておらず，どのような場合に傾きの正負が変わるのかが明らかにできればよいと考えているようである．②については，重視聴者が高い培養効果を受けたとしても，高い培養効果を受けた人が必ずしも重視聴者であるとは限らないという必要条件と十分条件の違いを十分に認識した上で解釈を行う必要性を述べている．③も，統計的に有意であるからといって，必ずしも理論的に意味があるとは限らないことなど，結果の解釈における注意の必要性を述べている．④は以前から出されていた批判であるが，テレビ視聴が必ずしも原因となっているとは限らないので，解釈には注意が必要であるということである．⑤は，Gerbnerらは，テレビ全体の統一されたメッセージの意味の影響を問おうとしているが，テレビのメッセージは，ジャンルによって，また番組一つ一つによっても異なっているという見方もできるのであるから，せめてジャンル別にメッセージを見ていくことを提案するものである．

以上，Potterによる指摘を簡単にまとめてみたが，これまでに出された主な批判は，ここにほぼ網羅されていると言ってよいだろう．

4. 主流形成

既に述べたように，Gerbnerらは研究の過程でさまざまな批判を受け

たが，そうした批判を機に，それまでの研究を発展させ，「主流形成 (mainstreaming)」と「共鳴現象 (resonance)」という新しい知見を得ている (Gerbner et al., 1980)．いずれも，属性別に見た培養効果に着目するもので，培養効果の有無を検証するだけであったそれまでの研究とは，少しテレビのメッセージに対する考え方が違っている．

ここでは，この「主流形成」に注目して考察を行う．というのも，Gerbner らが得た知見のうち，最も安定して現れるのがこの「主流形成」であるが，これに対する考察は，まだ十分に行われているとは言えないからである．Gerbner らによると，「主流形成」とは以下のように説明されている．

> 「主流形成」とは，テレビの世界の特徴やダイナミズムに接触することで培養されがちな，相対的に共通の見解や価値として考えることができる．「主流形成」という言葉によって，我々は，視聴時間の短い者は人口統計学的な属性によって多様な見解をもっているのに，視聴時間が長い者は属性間で共通性があることを表現しようとしている．言い換えると，異なる集団間での視聴者の回答に見られる差，つまりそうした集団間の文化的，社会的，政治的な特徴と関連すると思われる差が，テレビ視聴の長い者の間では消失する，または無くなる可能性があるということである (Gerbner et al., 1982: 104).

(1) 主流形成が見られた主な研究

主流形成が見られた研究は多いが，まず，Gerbner らがこの知見を得るに至った際の研究を見てみよう．1980 年の論文であるが，ここで Gerbner らは，「犯罪への恐怖は，個人的に非常に深刻な問題である (Fear of crime is a very serious personal problem)」という記述に対して「該当する」と回答した者を分析の対象としている．回答者全員を属性によって

下位集団に分け，さらにそれをテレビ視聴量別に分類し，その中で回答者の占める割合を比較している．収入によって「高」「中」「低」の3群に分け，さらにそれをテレビの視聴量によって分けて見た場合，先の記述に「該当する」と答えた者の割合は，テレビの視聴量が少ない者の場合，高所得者では10%，中所得者では16%，低所得者では35%で，最も割合が低い高所得者と最も割合が高い低所得者では差が25ポイントあったのに対し，テレビ視聴量が多い者の場合は，高所得者では26%，中所得者では25%，低所得者では33%で，最も割合が低い中所得者と最も割合が高い低所得者の差は8ポイントに過ぎず，重視聴者間では所得による集団間の差が縮小していたのである．同じ質問で，白人と非白人とで分けた場合も，軽視聴者間では29ポイントあった差が，重視聴者間では13ポイントに縮小していた (Gerbner et al., 1980).

政治的志向性に関する研究 (Gerbner et al., 1982) でも，主流形成は見られた．テレビはスポンサーとの関係から，広く視聴者を引きつけなくてはならないため，政治的には中道の立場をとりやすいことが知られている．これに基づいて，Gerbner らは回答者を支持政党ごとに分類した上で，政治的立場について「リベラル」「中道」「保守」のどれに相当するかを尋ねたところ，どの群でも重視聴者は「中道」と答える割合が高かった．次に，その政治的立場別に人種差別に関する質問の回答を見たところ，人種差別的な回答をする傾向がある者の割合は，当然ながら「保守」の者の間で高かったが，その他の群でも重視聴者はその割合が高く，「保守」の群の割合との差が，軽視聴者や中視聴者よりも小さくなる傾向が見られた．同性愛に対する態度についても，同様の結果が見られた．経済に関する問題では「リベラル」の方向に収斂してゆく傾向が見られたが，一般にテレビ視聴は，自分の政治的立場を「中道」だと思わせる働きを持ちながらも，実質的には「保守」的な態度を持たせる方向に向けて主流形成していく働きがあると Gerbner らは述べた (Gerbner et al., 1982: 126).

他にも，性役割ステレオタイプに関する研究 (Morgan, 1982) がある．テレビの世界の男女比は3対1で，女性は男性に比べて圧倒的に数が少なく，しかも多くは家庭の中に閉じこめられ，仕事の場に登場することは少ない．暴力の被害者として描かれることは多いが，結婚するとそのようなことは少なくなる．こうしたテレビの世界での女性の描写は，「女性にとって家庭が安全でふさわしい場所である」というメッセージを発していると Morgan は言う．そこで，こうした性役割に対するステレオタイプ的な見方がテレビ視聴と関係するかどうか，Morgan は青少年（6年生から9年生）を対象として，横断的および縦断的調査を行った．

その結果，横断的研究において，IQ の高い女子生徒の場合に，テレビ視聴量と性役割に対するステレオタイプ的な見方との間に有意な正の相関関係が見られた．IQ の高いテレビの重視聴者が，同じ IQ グループの軽視聴者よりもステレオタイプ的な回答をすることで，IQ の中・低度の者の回答者の割合に近づいていくという主流形成が見られたのである．

また，科学への志向性に関する研究 (Gerbner, 1987) もある．プライムタイムのドラマ番組の 70% で，科学や技術に対するイメージが描写されているが，中でも科学者の描かれ方は独特で，他の職業の者に比べて頭がよくて強く理性的であるが，社会性に乏しく，一人で仕事に専念し，自分の考えに固執する人物として描かれていた．Gerbner は，テレビで描かれる科学のイメージが視聴者の考えや行動にどのように影響を及ぼしているか培養分析を行ったところ，一般的にテレビの接触量が増えるほど，科学に対する好意的なイメージを持つ者の割合が減少していた．科学に対して最も好意的な志向を持つ者は，社会的な地位が高い軽視聴者であった．ここで主流形成が見られ，社会的な地位による差は，軽視聴者間と比べて重視聴者の間では縮小していた．

この他にも Signorielli (1990) の研究で，主流形成が報告されている．大坪 (2001) の研究で高校生を対象とした調査でも，テレビ視聴量と「テ

レビの世界のメッセージ寄りと想定した認識」をする者の割合との間に，安定した相関関係は見られなかったものの，主流形成は，ほぼすべての質問項目について見られた．このように主流形成の報告例は少なくない．

(2) 主流形成に関する批判

以上が主流形成が見られた主な研究例であるが，ここではGerbnerらが主流形成のモデルとして挙げた3つの例（図1参照）を見ながら，それについて批判的に検討してみる．

Gerbnerらの初期の想定では，テレビのメッセージは一つであり，それはメッセージ・システム分析によって明らかにできると考えられていたため，設定されたメッセージに関する質問への賛同者の割合は，同じ属性を持つ者の中では，傾きの大きさは異なれ，視聴量の増加に伴って一直線状に右肩上がりで上がっていくとされる．少なくとも下がることは想定されていない．しかし，図1中のBやCのケースに対しても，Gerbnerらは主流形成の例としている (Gerbner et al., 1994: 29)．初期の想定とは異なる点をPotter (1993) や斉藤 (2002) は指摘し，批判する．

こうした批判に対してGerbnerは，主流形成によって収斂していく方向が必ずしも右上とは限らないのは，培養には重力のような力が働くためだと説明している (Gerbner et al., 1994: 24)．Gerbnerの共同研究者であるMorganらは，初期に想定した単純な培養よりも主流形成を強調することに対して，主流形成は，テレビ視聴が共通の視点を培養するということをただ仮定したものであり，「テレビはもともと異質な人々の日々の文化に共通する主要な源泉となった」とGerbnerらが1976年の論文で述べているように，最も基本的な考え方に戻っただけなのだと述べている (Shanahan & Morgan, 1999: 85)．

しかし，これではこの批判に対する適切な回答になっているとは言えないだろう．ここで回答すべきことは，Gerbnerらがテレビのメッセージ

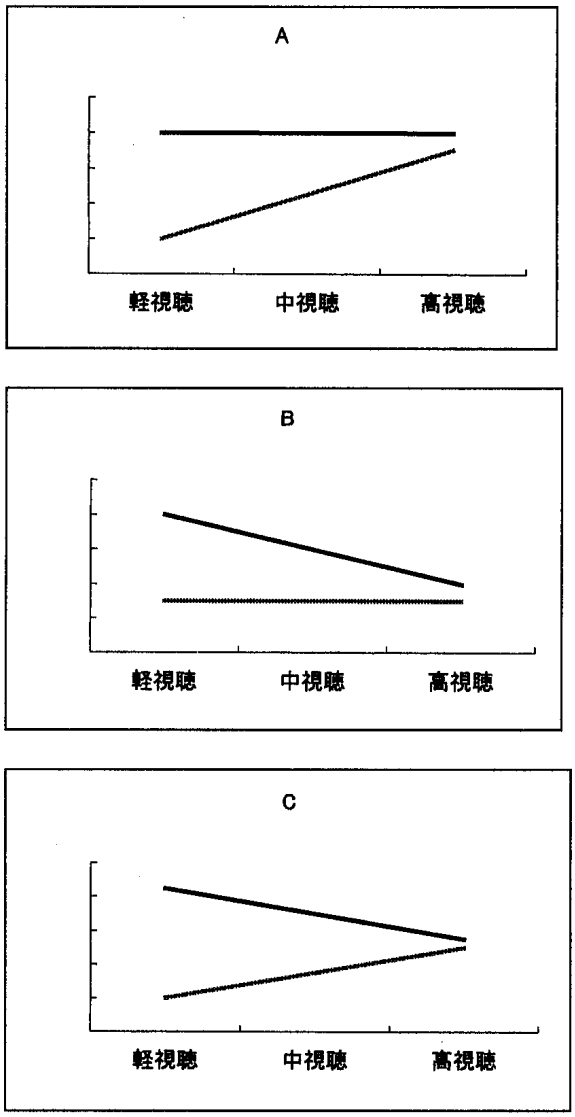

図1　主流形成のモデル

を一つしか認めてこなかったことに対して，改めてどのような見解を示すのかということではなかろうか．テレビの視聴量が増えるにつれて回答者の割合が減る下位集団が存在するという図1のBやCのケースは，そうした集団の者は，テレビ視聴量が増すにつれて，提示されたようなメッセージ解釈を行わず，別の解釈（提示された解釈と逆の解釈であることも考えられる）を行うようになる可能性を示している．だが，提示したものと別の解釈があり得ることを，Gerbner はもちろん Morgan らも，明確には認めていない．メッセージ・システム分析によって得られた結果はテ

レビの内容の一側面を表すものではあるだろうが，それに基づいて彼らが設定したテレビのメッセージは，単に一つの解釈に過ぎないのである．

Potterの整理による培養理論に対する主な批判のところで既に述べたように，培養理論でテレビのメッセージを単一のものとして扱ったこと，つまりオーディエンスが多様な解釈を行うことを全く想定していないことに対する批判は，これまでにもあった．Livingstone (1990a) は，Gerbnerらが分析したようなテレビドラマには多様なメッセージが隠されており，彼らの行った内容分析では，こうしたテレビの複雑で暗示的でイデオロギー的な意味を明らかにできないと述べ，Gerbnerらの内容分析の方法自体が問題点を抱えていることを指摘したが，培養理論では「暗黙裡に視聴者は受動的だという概念を採用している」(Livingstone, 1990a: 49) のである．

(3) 主流形成の意味

Gerbnerらが提示したテレビ番組のメッセージに対し賛同する者の割合は，テレビの長時間視聴者たちの間では下位集団間の差が縮小し，収斂していく傾向が見られた．収斂していく方向は基本的に保守的な方向であり，社会的地位や教育水準が高いリベラルな人たちが最も培養を受けやすいとShanahanらは述べている (Shanahan & Morgan, 1999: 106)．Gerbnerは培養分析での知見について「〔テレビ視聴は〕均質化と因襲尊重へ傾けるばかりでなく，生活や文化の他の局面で起きつつあるかもしれない変化に抵抗し拒否する気にさせることを示している（〔　〕内筆者)」と述べ，さらにこうした培養のダイナミズムを「伝統的な差異をあいまいにし (blur)，さまざまな概念をテレビの文化的主流に混ぜ合わせ (blend)，その主流を，中道とスポンサーの制度的利益の方に傾ける (bend)」と3つのBを用いて述べている (Gerbner, 1990: 261)．これはまさに主流形成のはたらきを述べたものであり，研究の後期には，Gerbnerは主流形成

こそ培養理論の中心的概念と捉えていたことが読み取れる.

主流形成は，あらかじめ存在している属性間の差異を低減，縮小させるテレビの働きを示している．これはテレビのメッセージとして一つの解釈を提示した場合に見られた現象であるが，他の解釈を提示した場合にも，同じように主流形成が見られるだろうか．複数の解釈を示した場合，高い割合で収斂していくのは，どのようなメッセージ解釈なのか．重視聴者の間でもテレビのメッセージを多様に受け取っているとしたら，何がその差異を生み出しているのだろうか．テレビの内容に対して多様な解釈が成立することを前提として研究方法を組み立て直すと，さらに多くのことが明らかにできるのではないかと思われる.

4. 共鳴現象

(1) 共鳴現象の発見

「共鳴現象 (resonance)」とは，テレビのメッセージが視聴者の日常生活世界の現実と一致するとき，培養が増幅されることを言う (Gerbner et al., 1994: 27). Gerbner らがこの知見を得るに至るには，以下のような経緯があった.

Gerbner ら (1976) は，全米ネットワークテレビで放送された平日のプライムタイムと週末の朝から午後2時までのドラマを分析し，テレビの中の世界では，当時のアメリカ社会の現実に比べると，極めて多くの暴力が発生しているという結果を得たが，この結果に基づいて暴力に関する人々の認知を調査し，テレビの視聴量によって比較したところ，重視聴者は軽視聴者よりも暴力の発生頻度を多く見積もり，犯罪への恐怖も高い傾向が見られた．Gerbner らは，この結果に対し，テレビの重視聴者は情報源をもっぱらテレビに依存しているため，現実認識がテレビの中の世界での「現実」によって歪められ，こうした認知や態度が見られたのだと解釈した.

しかし，これには批判が加えられた．Doob & Macdonald (1979) は，カナダのトロントで同様の調査を行ったが，回答者全員を対象とした場合にはGerbnerらの結果を支持する結果が得られたものの，それを都市部と郊外，さらにそれらを犯罪の多発地区と犯罪発生が少ない地区に分けて見たところ，犯罪への恐怖とテレビ視聴量との有意な関係があったのは，都市部の犯罪多発地区の回答者のみであった．この結果から彼らは，テレビの総合視聴量よりも居住地区が安全であるかどうかの方が，認知や態度に影響を与えているのではないかと述べた．

Gerbnerらはこの批判を受け，データを回答者の居住地区によって都市部と郊外にサブ・グループ化して分析を行ったところ，犯罪への恐怖は都市部在住者の方が高かったが，その差はテレビ視聴量が少ない者同士で比較した場合よりも，多い者同士で比較した場合の方がとりわけ大きかった．Gerbnerらはこの結果に対し「テレビで見ることが人々の日常生活世界の現実（知覚された現実でも可）と極めて一致するとき，これらは凝縮されて強力なテレビのメッセージの二倍の服用となり，培養を著しく高める」と述べた (Gerbner et al., 1980: 15)．そして，このようにテレビの世界と現実の環境とが一致して培養効果が増幅されることを「共鳴現象」と名づけたのである．

しかし，実際に共鳴現象が見られた研究は少ない．明確に示されているのは，この共鳴現象について初めて説明したGerbnerらの1980年の論文である．この論文では2つの例が紹介されている．1つは「犯罪への恐怖は，個人的に非常に深刻な問題である (Fear of crime is a very serious personal problem)」という記述に対して「該当する」と答えた者の割合で，男性の場合，軽視聴者は21%，重視聴者は25%で，その差が4ポイントであったのに対し，女性の場合は，軽視聴者は20%，重視聴者は32%でその差が12ポイントであり，これは現実の世界で被害に遭いやすい女性がテレビのメッセージに「共鳴」した例であるとされた．第

2番目の例は，やはり同じ記述文に対してで，郊外に住む者の場合には軽視聴者は 19%，重視聴者が 29% でその差は 10 ポイントであるのに対し，都市部在住者の場合は軽視聴者が 26%，重視聴者が 46% で，その差 20 ポイント増加しており，これは犯罪が多発する都市部に在住する者が，テレビのメッセージに「共鳴」した結果であるとされた．

Shanahan & Morgan (1999) は，これまでの培養理論に関連した研究をメタ分析して検討を加えたが，共鳴現象は主流形成ほどには一般的に現れる現象ではないと述べている (*ibid*: 87)．そして，この共鳴現象は，犯罪に対する知覚以外では見られないので，他のコンテクストにおいて，いつ，いかにしてこの現象が見られるのか，研究者は理論的な発展ができなかったと述べている (*ibid*: 158)．確かに彼らの言うように，共鳴現象が現れたとされる研究報告は，犯罪に関するトピック以外には見当たらない．それは，他のトピックスでは共鳴現象を検証する研究が行われなかったためであるかもしれない．しかし，犯罪や暴力についての研究は数多く存在しても，そこで共鳴現象はほとんど報告されていないのである．つまり，たとえ犯罪に関するトピックであっても，共鳴現象は安定して現れるわけではないということである．それはなぜなのだろうか．どのような場合，共鳴現象は安定して見られるのだろうか．共鳴現象が見られたわずかな例が犯罪をトピックとする研究だけだとしたら，これをテーマとした研究を検討することで，その手がかりが得られるかもしれない．

(2) 犯罪への恐怖の研究——Hale (1996) のレヴューを手がかりとして

暴力や犯罪をトピックとする研究は，Gerbner らの研究の中心を占める．既に述べたように，メッセージ・システム分析によってテレビの中の世界では暴力や犯罪が頻発していることが明らかになったため，テレビ視聴量と暴力や犯罪に関する人々の認識や信念・態度との関係を明らかにすることが，初期の研究の中心を占めたのである．

彼らの設定した質問は大別すると，①犯罪や暴力の発生頻度または回答者自身や個人が犯罪や暴力に巻き込まれる頻度に対する見積もり，そして，②犯罪や暴力に巻き込まれる不安や恐怖，の2つに分けることが可能である．①は知覚に及ぼす影響を見ようとしたもので，第1次培養 (first-order cultivation) と呼ばれ，②は信念や態度に及ぼす影響で，第2次培養 (second-order cultivation) と呼ばれている．かつては第1次培養によって生じた現実認識の「歪み」から第2次培養が生じると考えられていたが，Hawkins & Pingree (1990) は，こうしたプロセスを支持する証拠はなく，両者は別のもので，それぞれが独立してテレビの内容に影響を受けるようであると述べた (*ibid*: 43)．Shanahan & Morgan (1999) らも，これらは概念的に区別する必要があると述べている．

共鳴現象が見られた数少ない例 (Gerbner et al., 1980) は，犯罪の恐怖が回答者にとってどのくらい深刻な問題であるのかを問うものであり，第2次培養に該当する．共鳴現象は犯罪の発生頻度を見積もる第1次培養では見られないのかといった問題も検討の必要はあるだろうが，ここはまず，培養理論の研究では犯罪の恐怖について尋ねたものは多いものの，なぜ共鳴現象が見られた例は極めて少ないのかという問題に絞って検討してみたい．実は「犯罪への恐怖 (fear of crime)」をテーマとする研究は，犯罪学や被害者学など他分野にもまたがっており，多くの研究の蓄積がある．Hale (1996) はそれらの研究をレヴューしているが，それを見ると，この「犯罪への恐怖」という概念が容易には捉え難いことがわかる．

「犯罪への恐怖」を捉えるために，これまで200以上の研究や調査が行われてきたが，Hale は，「理論的非一貫性と経験的混沌が，犯罪への恐怖の研究の今日的風潮であったと言える．研究の発展のためには，今後は同じ概念的曖昧さと混乱を避ける必要がある」と述べている (Hale, 1996: 94)．彼は，「犯罪への恐怖」を経験的に測定しようとする尺度について詳細に検討を加えた．そのために「恐怖 (fear)」の概念について検討してい

るが，これは情動的 (emotional) な反応であり，リスクに対する見積もりや関心または懸念 (concern) とは異なると言う (*ibid*: 92)．たとえ同じようにリスクを見積もったとしても，犯罪への恐怖は人によって異なると述べている．これについて彼が論文中で紹介した Warr によると，リスクを同じように見積もったとしても恐怖が個人によって異なるのは，恐怖という概念には，「犯罪に対する知覚された深刻さ (perceived seriousness of the offence)」と「リスクに対する敏感さ (sensitivity to risk)」が関係しているからだと言う．女性や高齢者が恐怖を感じやすいことが多くの研究で示されているが，それはこうした要因が働くためであると言う．また，犯罪への恐怖は，客観的な犯罪の発生数と必ずしも関係するわけではないことも述べている (*ibid*: 106)．一般的には，犯罪の発生数が多い地域の住民の方が，少ない地域の住民よりも，犯罪への恐怖が高いことは多くの調査や研究で示されているようであるが，それよりも居住地域の社会的統合が強く関係していることを Hale は明らかにしている．社会的な統合力が弱まっていると感じるとき，住民は「犯罪への恐怖」を感じるのである．「犯罪への恐怖」は，その情動的な要素を捉えることができるような操作的定義が必要である．

また，回答者が抱える具体的な「犯罪への恐怖」を，できるだけ正確に捉えるには，回答者の日常生活に具体的に結びついた状況での具体的な犯罪について尋ねなければならないと述べる．これを捉えるための質問として，「夜，一人で近所を歩く」という状況を設定して，その恐怖を尋ねたものは多いが，この問題点は，一つには，こうした状況は回答者の多くにとって仮定された状況であり，現在回答者が抱えている犯罪への恐怖はこれでは捉えきれないということであり，二点目は，この状況から生まれる恐怖は必ずしも犯罪がもたらす恐怖であるとは限らないということである．特に高齢者は転倒する恐怖なども抱えており，犯罪への恐怖を捉えるなら，それを明示する必要があると言う．また，犯罪にしても，どのよう

な犯罪であるのかを特定しないまま一般的 (global) な尺度を用いると，具体的に犯罪を特定した場合と結果が異なることを Hale は示している．たとえば，一般的な尺度を用いると，年齢が高いほど犯罪への恐怖が高いという結果が出るが，犯罪を特定すると，年齢との関係は弱いか存在しないという結果が複数の研究で得られていると言う (*ibid*: 92).

このように「犯罪への恐怖」を捉えることは難しいが，そのための尺度設定に関して彼が紹介しているのは Ferraro & LaGrange (1987) のアドバイスである．それは以下の通りである (*ibid*: 93–94).

① 犯罪への恐怖を測定する際は，犯罪についての判断や懸念ではなく，恐怖に対する感情的な状態を引き出さなければならない．従って，「どのくらい怖いか」といった言葉を含むべきである．個人的なレベルであれ地域レベルであれ，リスクに対する査定や犯罪への懸念は，行動の次元での質問とともに，それ自体は重要な質問であるから，この研究に含めるべきである．しかし，恐怖の代用として使ってはならない．

② 犯罪への恐怖を測定する際は，犯罪について明確に触れなければならない．これまで用いられてきた尺度の中には，犯罪について漠然とした言い方であったり，ほのめかしたりするだけのものもあった．理想的には，被害のカテゴリーが具体的に示されているべきである．このことは，たとえば個人または所有物への犯罪の恐怖についての，因子分析などのデータ処理技術を使った指標の形成に繋がるかもしれない．

③ 質問は仮定法で尋ねるべきではない．仮にある状況になったとしたら，という仮定で回答者に尋ねるべきではないのである．それよりも，恐らくは「あなたの普段の生活で」という言葉を明確に含めながら，普段の状況で感じていることを具体的に尋ねるべきである．

Hale および Ferraro & LaGrange らは，地域の具体的な安全対策に寄

与することを目的に，その地域に暮らす人々の犯罪への恐怖を可能な限り正確に捉えるための尺度について検討し，上のようなアドバイスを行ったわけであるが，そこに至る過程に見られる彼らの「犯罪への恐怖」概念は，「認知的—感情的」という知覚のタイプによる軸と，「一般的—個人的」という言及のレベルによる軸の2次元で構成されている．既に述べてきたことであるが，回答者の居住区での具体的な犯罪への恐怖は，一方の軸では感情的なところに，もう一方の軸では個人的なところに位置づけられている．Hale は，最近の「犯罪への恐怖」の研究は，このような多次元的な性質が，より強調されるようになっていると述べている (*ibid*: 84).

このように「犯罪への恐怖」は測定することが極めて難しい概念であり，これまでの研究には問題が多いことがわかった．これをトピックとした培養理論に関する研究で，犯罪を多次元的に捉えようと試みたものに Weaver & Wakshlag (1986) の研究がある．彼らはまた，犯罪経験との関係も明らかにしようと努力している．次に彼らの研究を見てみよう．

(3) Weaver & Wakshlag (1986) の研究

Weaver & Wakshlag (1986) は，テレビ視聴量と「犯罪の被害に遭う可能性 (vulnerability to crime)」との関係を，培養理論の枠組みを用いて研究した．その際，経験の様式 (modality of experience) にも着目し，回答者が犯罪被害に遭った経験を持つ場合（直接経験）と，友人や知人，親戚などが犯罪に遭ってそれを伝え聞いた場合（対人間のコミュニケーションによる間接経験）およびマス・メディアのみによる間接経験の3つの様式に分けて，テレビ視聴と犯罪への被害への遭いやすさへの知覚との関係を見た．テレビの視聴に関しては，一日あたりのテレビの総視聴量を問題にするのではなく，犯罪番組の視聴を見るべきだとの立場をとっており，調査を行う前の1週間，プライムタイムに視聴した番組のうち犯

罪番組が含まれているか否かで分類している．犯罪に関する質問は14項目ほどあり，それに対して「全くない」から「非常にある」までの11件法で尋ねている．その結果を因子分析し，3因子を抽出したが，それらは，質問文の中で具体的に仮定された場面（テレビドラマや映画でみるような場面）での犯罪に対する「状況的 (situational) 不安」，回答者の居住内で発生する犯罪への「環境的 (environmental) 不安」，回答者が将来巻き込まれることへの「個人的な (personal) 不安」と名づけられた．

過去の研究から，こうした犯罪への不安にはジェンダー要因が大きく働くため，いずれもジェンダーによる統制は行っている．分析の結果，犯罪ドラマ視聴と犯罪への不安について統計的に有意な関係が見られたのは，次の3つだった．まず，経験の様式がメディアによる者の仮定的な状況での「状況的不安」で，これは強い正の相関 (r=.53) が見られた．次に，同じく経験の様式がメディアによる者で，回答者が将来巻き込まれることへの「個人的不安」に中程度の相関 (r=.28) が見られた．また，経験の様式が直接経験の者は「個人的不安」に対して有意な関係が見られたが，強い負の関係 (r=−.57) だった．犯罪への不安に対する「培養」は，直接経験を持たない者が，仮定された状況での被害の遭いやすさとして感じている不安に現れるという結果が，ここでは得られた．犯罪の直接経験を持つ者は，犯罪番組をよく見る者ほど，自分自身が将来犯罪へ巻き込まれる不安が低かった．

(4) 「犯罪への恐怖」と共鳴現象に対する考察

「犯罪への恐怖」については，Hale (1996) が述べたように，多次元的に捉える必要があるだろう．培養理論を用いた Weaver & Wakshlag も「『犯罪への不安』は，最初の概念化よりもずっと複雑な構成物なのである」(*ibid*: 153) と述べており，既に見たように，犯罪への不安を3つの因子によって3次元で捉えている．しかし，この因子を構成するものの

中には，Hale が不安や恐怖とは明確に区別すべきだと述べたリスクへの見積もりに関する質問も入っている．Hale (1996) の指摘するように，この研究に関しては，概念的にも操作的にも，もっと厳密な定義を必要としていると言えるだろう．

共鳴現象が一般的に見られない原因には，このように，それを検証しようとした「犯罪への恐怖」の研究方法自体に問題があったことが考えられる．それは Hale らの指摘を手がかりに，今後洗練させていくしかない．今，ここでは共鳴現象と直接経験との関係について考察を加えておく．

Gerbner らは，テレビのメッセージと日常生活世界の現実が一致したときに共鳴現象が起きると述べた (Gerbner et al., 1980) つまり，ここでは，直接経験があるか，無いとしても直接経験の可能性が高い状況に回答者は存在していることが想定されている．ところが，Weaver らの研究 (1986) では，直接経験がある場合には，テレビの視聴量と犯罪への不安はむしろネガティブな関係にあった．Hale (1996) も，犯罪の直接経験者は「中和化 (neutralization)」というテクニックを使って自らの被害体験に対処するため，つまり，犯罪被害の経験を将来への学習と捉えなおすなど積極的な意味づけを行おうとするため，犯罪への不安との関係は多様化するという研究結果を報告している (*ibid*: 105)．とすると，共鳴現象は，犯罪被害の直接経験はないけれども蓋然性が高いと知覚した者に現れる可能性が強く示唆される．Weaver & Wakshlag (1986) の研究では，親戚や友人などの被害経験を聞くという対人間のコミュニケーションによる間接経験の場合には，犯罪への不安とテレビ視聴の関係は全く見られなかったが，Hale のレヴューでは，間接経験と犯罪への不安との関係は一般的に広く見られる現象であるとされている (*ibid*: 105)．また，メディアによる間接経験については，Hale は，報道された被害者や犯罪の発生した場所，そして恐れている犯罪の形態に対する類似性の知覚が高まれば，「犯罪への不安」も高まるとする研究を紹介している (*ibid*: 110)．これらの結

果を考慮すると，回答者個人が犯罪に巻き込まれる蓋然性への知覚を捉える変数が必要であるように思われる．さらに，その判断が何によるものなのか，メディアによるものであるなら，どのメディアによるものであるのかも，そのメディアの視聴量と共に捉えることが必要であろう．

共鳴現象については，果たしてそれが一般的に見られる現象であるのかを検証するにも，まだまだ精緻化させていかなければならない部分が多々存在する．しかし，この作業は，共鳴現象が犯罪以外のトピックスでも見られるかどうかに発展させていくためばかりでなく，このトピックに限ったとしても，リスク認知研究に貢献する可能性を有していると言えよう．

5. 培養理論の目指すもの

培養理論に対しては，先に Potter (1993) によるまとめで取り上げたようなさまざまな批判がなされてきた．それに対して Gerbner らは応戦したり[1]，批判を取り込んで自分たちの理論を洗練させたりしてきた[2]が，研究の初期には研究方法上の問題点が批判の中心であり，Gerbner らの研究目的と照らし合わせた上での批判はほとんどなかった．批判が方法上の問題に集中したことに対して Gerbner らは，斉藤 (2002) も指摘するように，培養理論の目的が正しく理解されていないことに因ると捉えていた．Gerbner らは，批判の多くは，培養効果をテレビ視聴による短期的な個人レベルの効果を捉えるものと誤解していると考え，「個人差や即時的な変化に関心を集中させていたら，研究戦略に対してばかりでなく，民主主義政府に対する伝統的理論に対しても問題を提起しているテレビの深遠で

[1] 最たるものは Hirsch との論争であろう．二人の論争は 1980 年から 81 年にかけて Communication Research 誌上で行われた．

[2] 既に本稿本文で述べたように，Doob & Macdonald (1979) の批判を受けて，Gerbner らは回答者の居住地区を変数として盛り込み，「共鳴現象」の発見へと至った．また，Hirsch からの批判で変数のコントロールに注意を払うようになった結果，属性による培養効果の差を改めて認識し，それが「主流形成」の発見へと至ったとも考えられる．

歴史的な挑戦を見逃してしまう」と述べている．その挑戦とは「多様な概念および態度を吸収して，安定的で共通した主流へと変えてしまう」ことであり，培養理論とは「概念的な潮流や逆流といった極めて多様なものを，テレビの主流へと引き寄せる一貫した遍在する力の発見に基礎を置く」ものであると述べている (Gerbner et al., 1994: 21)．つまり，彼らが意図したことは，テレビの放送内容全体に暗示されたメッセージが人々の認識や信念や態度を均質化させていくという，テレビの長期的・累積的なマクロレベルへの影響を捉えることであったと言えよう．であるから，培養の効果サイズを上げるためにもジャンル別視聴によって培養効果を見ていくべきであるとの批判 (Hawkins & Pingree, 1981; Potter & Chang, 1990) が出されようとも，「テレビ番組タイプのほぼどれにも現れる一貫したイメージや描写，価値というものがあり，テレビ視聴者は逃れられない．それは，具体的な番組やタイプまたはジャンルの中というより，システムとしてのテレビの中に埋め込まれた全体としてのメッセージである」と述べ (Gerbner et al., 1994: 25)，それはジャンル別視聴で見ていくのでは捉えられないとして，その批判を一貫して退けるのである．

こうした培養理論の目的は，ヨーロッパの文化理論の批判的アプローチと相通じるところがある．Perry は，培養理論をマルクス主義的立場に立つものと捉えているようで，「この理論は，テレビドラマの内容は象徴的に資本主義経済の中で作用する商業的マス・メディアから自然発生したものを表現している」と述べ (Perry, 2002: 199)，培養とは「進歩的な変化を妨げる大きな文化的過程であり，それによって社会的エリートや資本家の文化が大衆を操作する方法である」(*ibid*: 201) と述べている．Adoni & Mane も，Gerbner らが社会の権力構造というマクロ社会的な要素を実証研究に取り込もうとしていると捉え，培養理論がネオマスクス主義の研究と類似していることを指摘している (Adoni & Mane, 1984: 335)．Perry も Adoni & Mane も，培養理論はアメリカの経験的研究とヨー

ロッパの批判的研究を架橋するものであるとして評価する．しかし，その研究方法については，問題点を指摘している．

Adoni & Mane は，培養理論ではマクロ社会的な要素が適切な社会的かつ経済的な用語で概念化されていないこと，また，マクロ社会的な変数は本来抽象的なものであり，個人と直接関係付けることができないため，直接的な様式によって測定することが不可能であることの2点を挙げている (Adoni & Mane, 1984: 335)．この批判の第一点目は，彼らが実際に測定した暴力の頻度などは，マクロ社会的な要素として測定されるには不適切であることを指摘したものと思われる．これと同様のことは，Potter (1993) も指摘している．彼は Adoni らが「マクロ社会的な要素」と表現したものを「極めて高度に一般化されたテレビのメッセージ」と表現しているが，Gerbner らは極めて高度に一般化されたテレビのメッセージを測定しようとしていたにもかかわらず，すべてのジャンルやタイプに浸透している一般的なテーマや教訓については実際に測定していないと述べる．彼らが実際に測定したのはドラマという一つのジャンルに現れる犯罪や離婚の頻度であるが，これは，およそそれに該当するものとは言えないと述べている (Potter, 1993: 587)．Potter は，こうした「極めて高度に一般化されたテレビのメッセージ」が測定不能であるとは言っていないが，培養理論がその本来の目的を貫くなら，メッセージ・システム分析によって，すべてのジャンルやタイプに浸透している極めて高度に一般化されたテレビのメッセージの存在を明らかにしなければならないと言う (*ibid*: 589)．

ここまで述べてきたように，Gerbner らの研究が目指したものとその研究方法には，斉藤も指摘するように，ずれがあるように思われる（斉藤，2002: 38）．Gerbner らは主流形成の知見を得たことによって本来の目的に少し近づくことができたと思われるが，初期の研究での問題点を Gerbner らが十分に認めようとしないことが，様々な批判を行ってきた

論者とGerbnerらの議論のかみ合わなさの原因となっているように思われる．Gerbnerらが研究の目的を貫き通すなら，これまでの暴力や犯罪を中心とした分析では本来の目的とずれていることを認めた上で，たとえ極めて困難だとしても，テレビ内容の全体に遍在する一貫して流れているメッセージというものを，明らかにする方法を新しく見出す必要があるのではなかろうか．それがオーディエンスにどのように受け取られるのかはまた別の問題としても，質的な研究方法も取り入れながら，追求していく必要があろう．その上で，オーディエンスのいくつかの解釈について，主流形成が見られるかどうかの検証作業は，これまでの培養理論の枠組みに沿った量的な調査によっても，意味ある作業となるだろう．また，その一方で，Potter (1993) が整理したような批判を受け入れ，現在の培養理論の枠組みを実証研究に適したものに洗練させていくことも，たとえそれはもはや培養理論とは呼べないものとなったとしても，今後のコミュニケーション研究においては有益であると思われる．

6. む す び

以上，培養理論について「主流形成」「共鳴現象」およびその目指すものについて考察してきた．培養理論は「経験主義者からは『非科学的』でイデオロギーに縛られていると嘲笑され，同時に批判的立場の者たちからは，無邪気に量的客観性の神話に陥っていると非難された」とMorganらが述べているように (Shanahan & Morgan,1999:82)，現在のままでは極めて中途半端なものに終わっているように思われる．「主流形成」という知見を得たことによって，Gerbnerらは本来の研究目的に少し近づくことができたが，まだ十分と言えるものではなかろう．彼らの研究の目指すものは，Perry (2002) らも評価しているように，アメリカの経験的研究とヨーロッパの批判的研究を架橋する可能性をもつ．本来の目的のためには，メッセージ・システム分析の方法の改善，オーディエンスによる多

様な解釈を認めた方法の採用，質的研究方法の援用などが必要だろう．

「共鳴現象」の検討では，それを検討する際に用いた「不安」という概念の捉えにくさが示され，第二次培養として信念や態度や価値を捉えようとする際，概念的な定義を明確にしておく必要性が示唆されていた．「共鳴現象」については，こうした問題を解決した上で改めて検討すべき課題として残されたが，犯罪や暴力をトピックとした場合には，リスク認知研究に貢献する可能性が示されている．

テレビ放送が開始されて50年が経過し，メディアの中でのテレビの優位性は，今は保持されているものの，もはや高まることはないように思われる．テレビの優位性を一つの前提としてきた培養理論は，現在のままでは限界点を多く抱えているが，ここで検討してきたことを加味して発展させたものには，まだ有効性が残されているのではなかろうか．特に，価値やイデオロギーといったレベルまでにも及ぼす影響を実証的に捉えようとする試みは，極めて困難であるとは言え，試してみる価値を十分残しているだろう．ただし，テレビの優位性には翳りが見られることを鑑みると，今後は，Potter (1993) も指摘するように，現代の消費主義的価値を含んだメディア内容全般への接触を問題として，特にテレビにこだわらない方法を採ることも検討の余地があるかもしれない．

引用・参考文献

Adoni, H. & Mane, S. 1984 Media and the Social Construction of Reality: Toward an Integration of Theory and Research, *Communication Research,* **11**(3), 323–340.

Doob, A. & Macdonald, G. 1979 Television Viewing and Fear of Victimization: Is the Relationship Causal? *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**(2), 170–179.

Ferraro, K. F. & LaGrange, R. 1987 The Measurement of Fear of Crime, *Sociological Inquiry,* **57**, 70–101.

Gerbner, G. 1987 Science on Television: How It Affects Public Conceptions.

Issues in Science and Technology, Spring, 109–115. (=Morgan, M. (ed.) 2002 *Against the Mainstream—The Selected Works of George Gerbner,* New York: Peter Lang Publishing Inc., pp. 343–349 に再録).

Gerbner, G. 1990 Epilogue: Advancing on the Path of Righteousness (Maybe), In Signorielli, N. & Morgan, M. (eds.) *Cultivation Analysis: New Directions in Media Effects Research,* Newbury Park, CA: Sage. pp. 249–262.

Gerbner, G., Gross, L. 1976 Living with Television: Violence Profile. *Journal of Communication,* spring, 172–199.

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. 1980 The 'Mainstreaming' of Ammerica: Violence Profile No. 11, *Journal of Communication,* **30**(3), 10–24.

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M. and Signorielli, N. 1982 Charting the mainstream: Television's contribution to political orientations. *Journal of Communication,* **32**(2), 100–27. (=Morgan, M. (ed.) 2002 *Against the Mainstream—The Selected Works of George Gerbner,* New York: Peter Lang Publishing Inc., pp. 305–331 に再録).

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. 1994 Growing Up with Television: The Cultivation Perspective, In Bryant, J. & Zillmann, D. (eds.) *Media Effects,* Hillsdale, NJ: Lawrence erlbaum associates. pp. 17–41.

Hale, C. 1996 Fear of Crime: A Review of the Literature, *International Review of Victimology,* **4**, 79–150.

Hawkins, R. & Pingree, S. 1981 Uniform Messages and Habitual Viewing: Unnecessary Assumption in Social Reality Effects, *Human Communication Research,* **7**(4), 291–301.

Hawkins, R. & Pingree, S. 1990 Divergent Psychological Processes in Constructing Social Reality from Mass Media Content, In Signorielli, N. & Morgan, M. (eds.) *Cultivation Analysis: New Directions in Media Effects Research,* Newbury Park, CA: Sage. pp. 36–50.

Livingstone, S. M. 1990a *Making Sense of Television,* Oxford: Pergamon Press.

Livingstone, S. M. 1990b Interpreting a television narrative: How different viewers see a story, *Journal of Communication,* **40**(1), 72–85.

McQuail, D. 1994 *Mass Communication Theory: An Introduction third edition,* London: Sage Publications.

三上俊治 1987 現実構成過程におけるマス・メディアの影響力—擬似環境論から培養分析へ　東洋大学社会学部紀要, **24**(2), 237–279.

三上俊治・水野博介・橋元良明 1989 テレビによる社会的現実の認知に関する研究　東京大学新聞研究所紀要, **38**, 73–123.

水野博介 1991 文化指標研究と涵養効果分析—そのアイデア・発展・現状と評価　マス・コミュニケーション研究, **40**, 274–290.

Morley, D. 1992 *Television, Audience and Cultural Studies,* London and New York: Routledge. (＝成実弘至訳「テレビジョン, オーディエンス, カルチュラス・スタディーズ」, 吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』, せりか書房, 2000).

Morgan, M. 1982 Television and adolescents' sex-role stereotype: a longitudinal study, *Journal of Personality and Social Psychology,* **43**: 947–55.

Morgan, M. 1983 Symbolic Victimization and Real World Fear. *Human Communication Research,* **9**(2), 146–157.

Morgan, M. and Shanahan, J. 1997 Two decades of cultivation research: an appraisal and a meta-analysis. In Burleson, B. R. (ed.) *Communication Yearbook 20,* Thousand Oaks: Sage. pp. 1–45.

Morgan, M. & Signorielli, N. 1990 Cultivation Analysis: Conceptualization and Methodology, In Signorielli, N. & Morgan, M. (eds.) *Cultivation Analysis: New Directions in Media Effects Research,* Newbury Park, CA: Sage. pp. 13–33.

中村　功 1999 テレビにおける暴力—その実態と培養効果　マス・コミュニケーション研究, **55**, 186–201.

大坪寛子 2001 現実認識および社会的意識に及ぼすテレビの影響　慶應義塾大学修士論文.

Perry, D. K. 2002 *Theory and Research in Mass Communication,* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

Potter, W. J. 1993 Cultivation Theory and Research, *Human Communication Research,* **19**(4), 564–601.

Potter, W. J. & Chang, I. C. 1990 Television Exposure Measures and the Cultivation Hypothesis, *Journal of Broadcasting & Electronic Media,* **34**(3), 313–333.

斉藤慎一 1992 培養理論再考　新聞学評論, **41**, 170–183.

斉藤慎一 2001 マス・メディアによる社会的現実の構成　川上善郎（編）情報行動の社会心理学 (pp. 40–53), 北大路書房.

斉藤慎一 2002 テレビと現実認識——培養理論の新たな展開を目指して マス・コミュニケーション研究, **60**, 19–43.

斉藤慎一・川端美樹 1991 培養仮説の日本における実証的検討 新聞研究所年報(慶應義塾大学新聞研究所紀要), **37**, 55–78.

Shanahan, J. & Morgan, M. 1999 *Television and its Viewers: Cultivation Theory and Research, Cambridge*: Cambridge University Press.

Signorielli, N. 1990 Television's Mean and Dangerous World: A Continuation of the Cultural Indicators Perspective, In Signorielli, N. & Morgan, M. (eds.) *Cultivation Analysis: New Directions in Media Effects Research,* Newbury Park, CA: Sage. pp. 85–105.

Weaver, J. & Wakshlag, J. 1986 Perceiver Vulnerability to Crime, Criminal Victimization Experience, and Television Viewing, *Journal of Broadcasting & Electronic Media,* **30**(2), 141–158.